

大学生の幼少期の親からの意思決定支援の認知と自己決定感

川嶋健太郎¹・蓮見元子²

(¹東海学院大学人間関係学部心理学科 ・²川村学園女子大学)

要約

幼少期の子どもは選択・意思決定をする際に保護者からさまざまな意思決定支援を受けている。しかしこれまで我が国においては保護者の行っている具体的な意思決定支援にどのようなものがあるか検討されてきていない。そこで本研究では大学生を対象に幼少期において選択・意思決定場面において保護者はどのような行動をとっていたかを質問紙により調査することで、幼少期の保護者からの意思決定支援の認知にはどのような要因があるか、また現在の自己決定感との関連性について調べた。この結果、意思決定支援の認知には「助言をする」「急がせる」「理由を聞く」「誘導する」「認める」の5因子があると認められた。また自己決定感と「急がせる」因子は負の相関、「認める」因子とは正の相関が認められた。

キーワード：意思決定支援、自己決定感、保護者、大学生

はじめに¹

近年、自分のことを自分で決めることのできない子どもたちが増えている。大学生でも将来に何をしたいのか決められず、流されるままの学生が多い。この原因として幼少時からの意思決定の経験不足、また意思決定への周囲からの支援不足が疑われる。大学生がこれまで意思決定支援を受けてきたかを明らかにする必要がある。

保護者は赤ん坊に対して何を食べるか、どんな服を着るか聞くことなく、保護者の思う通りに食事を与え、服を着せる。しかし、子どもが言葉を喋りだし、保護者の与える事柄を拒否するようになる頃には少しずつ子どもに選択・意思決定を行わせていく。どのような事柄について選択をさせるのか（意思決定の機会の提供）、選択肢の種類はいくつか（選択肢の提供）、間違っただけをした際にはどのように言い含めるのか（正しい選択をするように誘導）など、さまざまな意思決定への支援を行っていると言える。

これまで選択・意思決定の支援については子育てのスタイルや選択機会の提供の効果が検討されてきた。自己決定理論から自律性支援をする子育てが子どもの認知および動機づけに対して効果的だと考えられている。自律性支援 (autonomy support) とは相手が自発的で自律的であるように能動的にサポートをすることをいう (Ryan, Deci, Grolnick, & La Guardia, 2006)。具体的には子どもが課題に取り組む際に、課題の目標を説明することや、子どもの気持ちを把握すること、選択肢を提供して子どもに主導権を与えること、子どもをコン

トロールしないことなどである。一方、統制的な子育てでは命令をしたり、親の都合を押し付けて子どもをコントロールすることである。

また応用行動分析の実践の中では選択機会を提供することで選択する力が向上するか検討されてきた。幼児と保護者、保育者を観察すると、時々大人は「これとこれ、どっちにする？」とか「今日はどんな遊びをする？」などの問いかけを子供にしていることに気づく。このように大人は子供の様子を見ながら「選択機会」を日常場面で自然に提供しているといえる。このような選択機会を与えることで自己決定の頻度を増やし、生活の質 (Quality of Life: QOL) を高められることが示されてきた (Reid & Parsons, 1991)。

これまで子どもの意思決定への保護者の支援のプロセスが明らかになっていなかったことから、川嶋・北原・蓮見 (2017) は幼稚園児の保護者を対象に家庭における選択場面での保護者による支援について半構造化面接によるインタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) によって意思決定の発達への保護者の支援について質的に検討した。この結果、29の概念と7つのカテゴリーが生成された。子どもの選択・意思決定場面において保護者の行う支援のプロセスは次のようなものであった。保護者は<選択のきっかけ>・<選択させる理由>・<選択機会を与える基準>にもとづいて選択機会を提供し、<子どもが選べる選択肢を設定>する。この選択機会において、子どもがしばらく選択できずに迷っている場合には<迷いへの

支援>が行われる。親が用意した選択肢や選択すること自体を子どもが拒否した場合には<拒否への支援>が行われる。子どもがその選択場面において不適切な選択肢を選ぶことにこだわった場合には<こだわりへの支援>が行われる。川嶋 (2017) は幼稚園教諭を対象にインタビューを行い、幼稚園での選択場面において保育者が幼児に対して行う意思決定支援を質的に分析している。これまで日本における意思決定に関連する尺度は、自己決定理論に基づくものと、意思決定論に関するものに大きく分けられる。自己決定理論に基づくものでは、小学生および中学生を対象とした自己決定意識尺度 (新井・佐藤, 2000) や大学生を対象とした自己決定感・自己決定欲求・有能感・有能欲求尺度 (桜井, 1993) などがある。また自律性支援に関して安藤 (2001) は教師による生徒に対する自律性支援の自己決定意識との関連を検討している。意思決定論に基づくものには磯部・久富・松井・宇井・高橋・大庭・竹村 (2008) は Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubomirsky, White, & Lehman (2002) をもとに日本語版の後悔・追求者尺度を作成している。しかしこれまで保護者の行う意思決定支援に関する尺度は作成されていない。

目的

以上から、本研究では幼少時に保護者から受けた意思決定支援の認知にはどのようなものがあるのか検討する。またこの意思決定支援の認知と現在の自己決定感との関連性についても検討する。ここで意思決定支援の認知とするのは、保護者から受けた意思決定支援を大学生が幼少期を振り返って評価するからである。

方法

参加者

東海地方および関東地方の大学生 199 名 (平均年齢 19.38 歳。男性 54 名, 女性 145 名) が参加した。このうち回答に不備のあった 17 名を除いた 182 名を分析対象とした。

調査時期

2018 年 10 月に実施した。

表 1 項目作成時に参考にした川嶋・北原・蓮見 (2017) での意思決定支援に関わる概念

概念	定義
1 選択肢を絞る	適切な範囲内で選択肢を子どもに提示する
2 制約を示す	子どもが自分自身で適切な意思決定ができるように、現実的な制約条件を示す
3 選択肢を広げる	選択肢を絞らず、できるだけ多くの選択肢を自由に選べるようにする
4 決められるまで待つ	子供が選択できるまで、口を出さずに保護者が待っていること
5 決定前の話し合い	選択肢を絞ったり整理するための話し合いをすること
6 気持ちに余裕がなくて待てない	何らかの原因でイライラして決められるまで待てられないこと。
7 時間制限で待てない	次の活動や期限があるため、ゆっくりと時間を使って援助できないこと
8 突き放して焦らせる	決められない子どもを焦らせる言動をすることで、子どもに早く意思決定させる
9 選択の提案をする	子供に保護者が正しいと考える選択肢を選択するように提案すること
10 拒否の理由を聞く	子供が拒否した際に、その理由を聞くこと
11 説得する	子供が拒否をしたとしても、理由を伝えてほぼ強制的に選択させる
12 強制する	子どもが選択したり、拒否したりしても、保護者の決定に従わせること
13 選択の理由を聞く	子どもが選択をした後に、保護者が子どもになぜそれを選んだか理由を聞くこと
14 選択の再考を促す	選択が不適切でも誘導せずに、もう一度自分で考え直すように促すこと
15 ダメな理由を言う	子供が選択した選択肢がダメである理由を説明すること
16 正しい選択肢への誘導	子どもの不適切な選択に対して、適切な選択肢を選択するように誘導する
17 大人が折れる	子供が自分の選択を強く主張するならば、重大なことでなければ尊重して認める
18 失敗から学ばせる	失敗から学ぶことを期待してあえて失敗させること
19 次の選択へのアドバイス	不適切な選択をした後に、次の機会にはよい選択をするようにアドバイスを与えること

質問紙の構成

質問紙はマークシート方式であり、Shared Questionnaire System (SQS)²を用いて作成された。質問紙の構成は以下のとおりである。

①参加者の属性について：参加者の性別、年齢、および学年について回答を求めた。

②幼少時に保護者から受けた意思決定支援項目（95項目5件法）：川嶋・北原・蓮見（2017）での幼稚園児の保護者に対して行った意思決定支援についてのM-GTAでの分析から生成された29の概念のうち、具体的な意思決定支援行動に関する概念20について、概念ごとに質問項目を作成した。質問項目の作成にあたっては、インタビューの中での保護者の発言をもとに具体的なセリフを含めた。発達心理学を専門とする大学教員によって項目を検討した結果、最終的に19概念（表1）について概念ごとに5項目ずつ、合計95項目を作成した。評定に際しては、調査参加者に幼少時（幼稚園・保育園から小学校低学年の頃）を思い出すように指示し、何かを選んだり決めたりする際に保護者はどうであったのか、各項目について、「1:当てはまらない」から「5:当てはまる」までで評定させた。

③自己決定感尺度（8項目6件法）：桜井（1993）が自己決定理論に基づいて作成した大学生向けの自己決定感尺度である。8項目から構成されていた。

手続き

集団配布の質問紙調査の形式で行い、大学での講義中に講義担当者の立会いの下で筆者らが実施した。

結果

幼少期の親からの意思決定支援項目95項目について平均値及び標準偏差を検討したところ偏りが見られなかったため、最尤法による探索的因子分析を行った。初期の固有値の変化は19.5, 10.8, 3.9, 3.4, 2.9, 2.8, 2.4, 2.3, 2.1, 1.9…であった。並行分析の結果からは8要因、VSS基準では2または13因子が示唆された。それぞれの因子数を仮定して因子分析を試みたが、因子の解釈可能性から5因子が妥当と判断した。そこで5因子を仮定して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が0.35以下の項目および複数の因子に高い因子負荷量を持つ項目、合計22項目を分析から除外し、再度最尤法・Promax回転による因子分析を行った。同様の基準でさらに13項目を分析から除外し、さらに最尤法・Promax回転による因子分析を行っ

た。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転前の5因子で60項目の全分散を説明する割合は45.5%であった。

第1因子は15項目で構成されており、「あなたが選んだことで失敗をすると、次回のためのアドバイスをしてくれた」「あなたが選択ミスをする、「次はこうしたら」と言われた」といった項目に高い付加量があることから、「助言をする」因子と命名した。第2因子は12項目で構成されており、「どっちにしようか考えていると「遅くなるから、もう帰っちゃうよ」と言われた」「忙しいと「もう、早く決めてよ」と言われた」といった項目に高い付加量があることから、「急がせる」因子と命名した。第3因子は9項目で構成されており、「嫌ならば、理由を教えて」と拒否する理由を聞かれた」「断固拒否すると、「どうしてなのか説明しなさい」と言われた」といった項目に高い付加量があることから、「理由を聞く」因子と命名した。第4因子は12項目で構成されており、「あなたが選んだものを見て、「それもいいけれどこっちもあるよ」と言われた」「選んでみたが、「違う色のも見てみよう」などと言われた」といった項目に高い付加量があることから、「誘導する」因子と命名した。第5因子は12項目で構成されており、「あなたが決めたことを変えないと、「自分で決めたんだからな」と認めてくれた」「選んでいるときに親は特に何も言わなかった」といった項目に高い付加量があることから、「認める」因子と命名した。

内的整合性を検討する α 係数を算出したところ、「助言をする」で0.90、「急がせる」で0.92、「理由を聞く」で0.85、「誘導する」で0.86、「認める」で0.84であった。

次に各因子を構成する項目の平均得点を算出し下位尺度得点とした（表3）。尺度得点間の相関係数を計算したところ、「助言をする」得点は「認める」得点とのみ有意な中程度の正の相関が見られた。「急がせる」・「理由を聞く」・「誘導する」得点は互いに有意な中程度の正の相関が見られたが、「認める」得点とは有意な弱～中程度の負の相関が見られた。自己決定感得点と意思決定支援の各尺度間の相関は、「急がせる」得点とは有意な弱い負の相関が、また「認める」得点とは弱い正の相関が見られた。

表2 幼少期の親からの意思決定支援 因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	共通性
助言をする因子15項目($\alpha=.90$)						
あなたが選んだことで失敗をすると、次回のためのアドバイスをしてくれた	.786	-.102	.060	-.008	-.182	.592
あなたが選択ミスをする、「次はこうしたら」と言われた	.780	.131	-.097	-.058	-.283	.505
あなたの決断が間違っていたとき、「今度があったら、こうしてみたら」と言われた	.735	.022	.088	.114	.072	.600
たとえばあなたが間違えても「次にはこうすればいいじゃない」と言われた	.696	-.045	-.075	.096	.011	.526
あなたの選択が間違いとわかったときに、次の機会のために助言をしてくれた	.641	.033	.012	.085	.238	.554
何かを選ぶ際に「これはこういう良いところ、悪いところがある」などアドバイスをされた	.618	-.039	.181	.128	.000	.455
あなたが選んだことで失敗しても、親が手助けをしてくれた	.613	-.047	.055	-.125	.090	.453
決めるための情報として、選択肢のいい点・悪い点を教えてくれた	.598	.143	.160	.006	.030	.386
あなたが考えていなかった、新たな選択肢があることを教えてくれた	.582	.214	-.084	.033	.273	.455
どちらにするか考えていると、一方のほうが良い理由を説明してくれた	.572	.025	.049	.239	-.088	.400
いくつか選択肢がある時にそれぞれの特徴・長所・短所を説明してくれた	.543	.036	.042	-.101	-.065	.266
どれがいいか悩んでいると1番良い選択を教えてくれた	.537	-.166	.181	.204	-.122	.398
たくさんある中から、選びやすいようにより分けてくれた	.514	-.209	.113	.103	-.025	.348
ダメというときには、理由を説明してくれた	.513	.117	-.137	-.049	.151	.328
あなたの選択がどうしてダメなのか、親が理由を説明した	.397	.050	.282	-.225	.031	.228
急がせる因子12項目($\alpha=.92$)						
どっちにしようか考えていると「遅くなるから、もう帰っちゃおうよ」と言われた	.163	.828	-.144	.008	-.135	.635
忙しいと「もう、早く決めてよ」と言われた	.042	.811	-.153	.128	-.071	.678
「もう行かなければいけないから、早く決めて」と言われた	.066	.808	-.165	.163	-.067	.684
「急いでいるから、迷ってないで決めて」と言われた	-.041	.726	.136	.030	-.035	.714
どちらにしようか迷っていると「早くしてよ、もう」と急かされた	-.061	.716	-.072	.144	-.121	.689
迷っていると「早く決めないと、無しにするからね」と言われた	.037	.704	.132	.030	-.065	.667
約束に遅れそうになると、ゆっくり選ばせてはくれなかった	.060	.657	.048	.109	.103	.471
グズグズ決めないでいると「もう知らないからね」と突き放された	-.004	.588	.229	.010	-.150	.666
親は機嫌が悪いと、早く決めると言った	-.158	.528	.232	.117	-.026	.634
親がイライラしているときには、急いで決めないとまずかった	-.247	.462	.001	.295	.065	.482
迷っていると「あと10秒で決めて、10、9・・・」とカウントダウンされた	.060	.442	.215	-.103	-.112	.340
お菓子を買うときには金額の上限を言われた	.054	.438	-.076	-.223	.104	.132
理由を聞く因子9項目($\alpha=.85$)						
「嫌ならば、理由を教えて」と拒否する理由を聞かれた	-.003	-.209	.905	.085	.128	.687
断固拒否すると、「どうしてなのか説明しなさい」と言われた	.176	.174	.692	-.200	-.106	.583
親の提案に嫌だと言ったら、「どうして嫌なの？理由は？」と言われた	.049	-.099	.682	.127	.000	.485
あなたが選んだ際に、「なんでこっちを選んだの？」と質問された	.183	.056	.629	.024	-.018	.478
拒否すると「なんで嫌なの？」と聞かれた	-.042	.020	.628	.190	.132	.491
親の意見に従わずに失敗したあとに「失敗を経験しないと納得しないから」と言われた	.104	.019	.522	.001	.168	.276
あなたが選んだものを見て「どうしてこれじゃないとダメなの？」と聞かれた	.013	-.006	.444	.218	-.134	.389
あなたが選択すると、選択した理由を聞かれた	.267	.025	.440	.016	-.215	.345
嫌な理由を言おうとしても親は聞いてくれなかった	-.049	.236	.379	-.213	-.273	.402

意思決定支援項目 95 項目への回答をもとに、調査参加者を非階層的クラスター分析(k-Means 法)により分類した。ハーティガンルールをもとにクラスター数を検討したところ3クラスターが適していると示唆された。図1に意思決定支援尺度得点および自己決定感尺度得点の平均をクラスターごとに表した。各意思決定支援尺度得点について、クラスターを参加者間要因とした1要因分散分析をしたところ、助言する($F(2,154)=38.19, p<.0001, \eta^2=.33$), 急がせる($F(2,154)=97.66, p<.0001, \eta^2=.56$), 理由を聞く($F(2,154)=56.20, p<.0001, \eta^2=.42$), 誘導す

る($F(2,154)=63.41, p<.0001, \eta^2=.45$), 認める($F(2,154)=27.40, p<.0001, \eta^2=.26$)のすべての要因についてクラスターの主効果は有意であった。また自己決定感についても同様に分散分析をしたところ、クラスターの主効果は有意であった($F(2,149)=6.27, p<.001, \eta^2=.08$)。さらに Holm の方法による多重比較をしたところ、クラスター2の自己決定感は他のクラスターに比べて5%水準で有意に低かった。

表2 幼少期の親からの意思決定支援 因子分析結果 (続き)

項目	I	II	III	IV	V	共通性
誘導する因子12項目($\alpha=.86$)						
あなたが選んだものを見て、「それもいいけれどこっちもあるよ」と言われた	.204	-.014	-.055	.667	-.069	.492
選んでみたが、「違う色のも見てみよう」と言われた	.081	-.118	.036	.666	.030	.417
選んだものを見て、「他にもこんなものがあるけど、どう?」と言われた	.319	.042	-.194	.633	.080	.468
あなたの選んだものを見て、「別の変えたら?」と言われた	-.160	.056	.152	.631	-.107	.645
「こっちのほうがカワイイよ(カッコいいよ)」と別のものを勧められた	.023	.022	-.048	.629	-.146	.466
決めかねていると「こっちにしたら?」と言われた	.119	.028	.018	.534	-.115	.374
嫌と言ったら「嫌かもしれないけれど、今回はお願い」と言われた	-.145	.077	.257	.438	.120	.366
あなたが選んだことが間違이었다ときに「ほら、そうなると思った」と言われた	-.170	.021	.192	.431	-.160	.437
嫌がると「今回だけでいいから」などと説得された	-.224	.211	.087	.421	.164	.335
あなたが選択したものについて、ダメ出しをされた	-.152	.248	.080	.415	-.168	.546
あなたが選んだ後に、「もう一度考え直したら」と言われた	.100	.068	.166	.398	-.248	.437
あなたがなかなか決められないで迷っていると「また今度にする?」と言われた	.066	.137	.079	.364	.245	.205
認める因子12項目($\alpha=.84$)						
あなたが決めたことを変えないと、「自分で決めたんだからな」と認めてくれた	.018	.039	-.051	.110	.703	.461
選んでいるときに親は特に何も言わなかった	-.029	-.050	.008	-.062	.579	.379
親は納得していなくても、あなたが選んだことを尊重してくれた	.130	-.150	-.166	.155	.557	.518
どれにしようか考えているときに、親はじっと待っていてくれた	.056	-.229	.151	-.170	.555	.542
迷っていると親はじっと見守っていてくれた	.129	-.253	.179	-.082	.528	.508
特に急いでいないときにはあなたが選び終わるまで親はゆっくり待っていてくれた	.045	-.015	-.225	.048	.525	.401
どうしようと悩んでいても親は代わりに選ばうとはしなかった	-.246	.029	.206	-.161	.524	.283
あなた自身で選んだ結果、失敗をしても「失敗したって大丈夫」と言われた	.220	-.005	-.071	-.049	.488	.408
あなたが拒否したら、無理強いはされずにほっておかれた	-.254	.019	.191	-.045	.441	.180
あなたが選んだことを変えないと、「仕方がない」と認めてくれた	.191	.051	-.202	.041	.429	.323
親の意見を無視して決めた結果、失敗したところ「まあ、これも経験だ」と言われた	.286	.001	.324	.037	.390	.337
できるだけたくさんの中から選ばせてくれた	.323	-.035	-.097	.065	.389	.379
因子間相関						
	II	-.262	-.022	.049	.337	
	III		.512	.411	-.433	
	IV			.400	-.295	
	V				-.337	

表3 自己決定感および意思決定支援尺度間の相関係数および平均値とSD

	II	III	IV	V	VI	M	SD
I 自己決定感	.006	-.210 *	-.065	-.145	.290 **	34.13	6.67
II 助言をする	—	-.152	.157	.092	.369 ***	3.15	0.72
III 急がせる		—	.546 ***	.585 ***	-.510 **	2.78	0.93
IV 理由を聞く			—	.542 ***	-.258 ***	2.44	0.76
V 誘導する				—	-.366 ***	2.98	0.75
VI 認める					—	3.32	0.66

考察

本論文では質問紙調査によって大学生が幼少期に保護者から受けた意思決定支援への認知と現在の自己決定感との関連性を調べた。本調査の結果、大学生が自身の幼少期を振り返って保護者から受けた意思決定支援には「助言をする」「急がせる」・「理由を聞く」・「誘導する」「認める」の5つの要因があることが示唆された(表2)。

それぞれの因子は川嶋・北原・蓮見(2017)での複数の概念を含んでいる。「助言をする」因子の項目は、【次の選択へのアドバイス】、【決定前の話し合い】・【選択の提案をする】・【だめな理由を言う】などから作られた項目であった。同様に「急がせる」因子は【突き放して焦らせる】・【気持ちの余裕がなくて待てない】・【時間制限で待てない】の項目であった。「理由を聞く」因子

は【拒否の理由を聞く】・【選択の理由を聞く】・【失敗から学ばせる】の項目であった。「誘導」因子は【正しい選択肢への誘導】・【選択の再考を促す】・【説得する】などの項目であった。「認める」因子は【大人が折れる】・【決められるまで待つ】【強制する】などの項目であった。同じ因子に含まれているそれぞれの項目はインタビューでは異なる文脈（例えば、子どもが決めかねている＜迷いへの支援＞の状況と間違っただけの選択に固執している＜こだわりへの支援＞の状況など）のなかで語られていたが、質問項目として文脈から外れると項目の文言から類似点があったのかと考えられる。

意思決定支援尺度得点間の相関を見ると、表3のように「急がせる」・「理由を聞く」・「誘導する」傾向の高い保護者は、「認める」ことが少なく認知される傾向にあるといえる。また「助言する」保護者ほど「認める」と認知される傾向がある。このことは「助言する」「認める」をGrolnickらの自立支援的子育て、「急がせる」「理由を聞く」「誘導する」を統制的子育てと見ることができると考えられる。

調査参加者の3つのクラスターから幼少期の保護者からの意思決定支援のタイプが推察される。クラスター1は「助言をする」「認める」得点が高く、「急がせる」「理由を聞く」「誘導する」得点が低いまたは中程度の調査参加者である。クラスター1の保護者は子どもが選択する際にあまり親の都合で急がせたり誘導したりせず、子どもの選択を認め、時々助言をしていたと考えられる。クラスター2は逆に「助言をする」「認める」得点が低く、「急がせる」「理由を聞く」「誘導する」得点が高い調査参加者である。クラスター2の保護者は親の考えで子どもの選択を変えたり、急がせたりする傾向があったと考えられる。クラスター3は「認める」得点はクラスター

1と同程度であるが、他の得点が低い調査参加者である。クラスター3の保護者は子どもが選択をする際にあまり何もせず、選択結果を認めていたと考えられる。

意思決定支援尺度についての調査参加者のクラスターにより、現在の自己決定感には違いが見られた。図1にあるようにクラスター2において自己決定感は他のクラスターよりも有意に低かった。尺度間の相関を考えると、これはクラスター2が他のクラスターよりも「急がせる」得点が高く、「認める」得点が低いことから考えられる。

本研究の課題として、第1に保護者による意思決定支援のすべての要因を網羅できたとは言えないことである。作成された95項目中、「失敗から学ばせる」概念のように、子どもの成長を願う親の願いを含んだ概念は具体的な行動として質問項目に表現することが難しいものがあり、結果として35項目が削除されている。また子どもの好みに応じて選択を準備するなど子ども自身では気づくことが難しい意思決定支援行動もある。これらの保護者による意思決定支援を質問項目として作成する課題がある。第2に意思決定支援の認知についての尺度の妥当性を検証する必要がある。これまで保護者による意思決定支援に関する尺度が作成されていないため、併存的妥当性を検証できない。項目の内容的妥当性を高めるとともに、保護者への調査も併せて行い、子どもによる保護者に対する評価と保護者による自身の意思決定支援の評価がどの程度一致するか検討しておく必要がある。

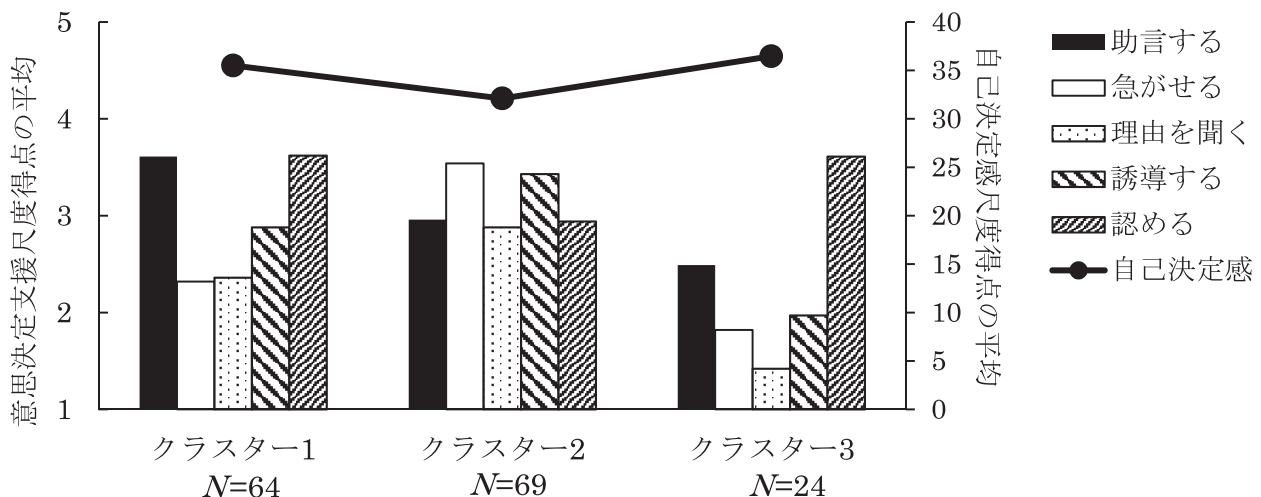


図1 クラスターごとの意思決定支援尺度得点および自己決定感尺度得点の平均

注

1. 本研究は平成30年度科学研究費補助金基盤研究(c)課題番号18K02500の一環として実施された。
2. SQS: Shared Questionnaire System プロジェクト日本語トップページ - OSDN (<https://ja.osdn.net/projects/sqs-xml/>)

引用文献

- 安藤史高 (2001). 自己決定意識が自律性支援の認知・動機づけに及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 73-81.
- 新井邦二郎・佐藤純 (2002). 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成 筑波大学心理学研究, 22, 151-160.
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久(2008). 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み 心理学研究, 79, 453-458
- 川嶋健太郎 (2017). 子どもの意思決定に対する幼稚園教諭の支援プロセスに関する質的研究 保育学研究, 55, 18-28.

- 川嶋健太郎・北原靖子・蓮見元子 (2017). 保護者による子どもの意思決定支援プロセスの質的分析, 日本発達心理学会第28回大会 (於 広島大学)
- Reid, D.H. & Parsons, M.B. (1991). Making choice a routine part of mealtimes for persons with profound mental retardation. *Behavioral Residential Treatment*, 6, 249-261.
- Ryan, R. M., Deci, E. L., Grolnick, W. S., & La Guardia, J. G. (2006). The significance of autonomy and autonomy support in psychological development and psychopathology. In D. Cicchetti & D. J. Cohen (Eds.), *Developmental psychopathology* (2nd ed., Vol. 1). Hoboken, NJ: Wiley
- 桜井茂男 (1993). 自己決定とコンピテンスに関する大学生尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, 29, 203-208.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1178-1197.

Undergraduate students' cognition of decision-making support in their childhood from the parents and sense of self-determination

KAWASHIMA Kentaro and HASUMI Motoko

Abstract

Children in early childhood are receiving various decision support from parents when making decisions. However, it has not been studied in Japan what kind of specific decisions support the parents are doing. This research investigated the factors underlying in the decision support behaviors of parents in early childhood by questioning for college students. The result showed there are five factors ("advice", "hurry up", "ask the reason", "induce" and "admit") in the recognition of decision support from parents. In addition, a negative correlation was found between the self-determined feeling and the "hurry up" factor, and a positive correlation with "accepting" factor.

Keywords : decision support, self-determination, parents, student